

第三編
事
務
局

第一章 戦災復興から再建へ（昭和二十一年～昭和三十一年）

終戦から朝鮮事変のはじまる昭和二五（一九五〇）年までの日本経済の特色は、激しいインフレと国民生活の窮乏であつた。連合軍占領下での深刻な食糧不足、新円切替えによる混乱でヤミ値でなければ何も買えず、給料生活や労働者の生活は全く破局的になつていった。長期間圧政のもとで押えられていた民衆のエネルギーが労働組合運動で一気に爆発し、あらゆる産業部門で首切り反対、賃上げ、民主化要求の争議がおこつた。

二四年のドッジラインによつて超均衡予算が組まれたのでやや安定をみたが、その反面経済界はひどい金詰まりに見舞われ、戦後最大の不況にあえいだ。ところが、朝鮮事変は日本国民に予期せぬ結果を招き、全面的に復興のチャンスを迎えた。

かくて、二六年九月に対日平和条約が調印されて翌年四月に発効し、ここに日本は、敗戦後七年でようやく独立国となることのできたのである。

一新制大学として出発

1 教職員協力体制で家庭的学園に

昭和二〇（一九四五）年三月の東京大空襲は、狭い鶏声台を廃墟と化してしまった。三百発もの焼夷弾が木造校舎を焼失させ、かろうじて焼け残った鉄筋コンクリート造校舎等建物は、大講堂・図書館・西校舎の三棟しかなかった。

二二年三月、藤原猶雪学長のもとに三沢元貫学監・成石義之庶務課長兼学生課長・林吉博教務課長・神作隆貫図書課長以下十余人の事務職員が、図書館一階の事務室で、どこから手掛けてよいか判断に迷う業務に忙殺されていた。四月になると、復員してきた学徒が古びた軍服姿で復学してキャンパスもいくらか活気づいたが、学生総数も文学部・予科・専門部四科を合わせて六百人余という淋しさだった。

学長室・事務室・会議室等を大講堂一階の演習室・教室に移転した同年九月から小沢文四郎教授が学生課長の兼務を引き受け、川越市の寺の住職の近藤鉄城も復興課長となった。一〇月には愛沢恒雄が福島から上京して学監に就任し、昇格した成石との三学監体制が復活した。翌春には柳井幸太郎が福島から上京して会計課長となり、戦災復興から再建への旧式ながら意欲的な組織機構を具備するようになった。

橘高倫一・西義雄・毛塚栄五郎・宮崎幸三・平野宣紀などの教授も、研究と教育のかたわらカリキュラム編成その他に献身的に協力し、教職員、校友一致団結の家庭的な明るい雰囲気を醸成するようになった。

2 上福岡移転構想と新制大学移行

病気がちだった藤原学長が辞任し、昭和二三年三月、加藤虎之亮教授が衆望をになって第一六代学長に就任した。加藤学長は皇后の侍講として知られ、顎髭を胸までなびかせて大講堂一階奥の学長室に毎日出勤し、校地問題、新制大学への移行、校舎建設資金調達など大学経営の労苦の先頭に立った。当時の財団理事は学長ただ一人だったので、愛沢学監が理事の代行業務の処理にあたった。

戦災後の再建を背負って立ち上がった大学の敷地は狭隘で、設置基準に対してはなほ大きく不足していた。新制大学に移行するには校地面積が重要課題となるので、八方手をつくして隣接地の買収に努力する一方、かねてから近藤復興課長が提案していた上福岡の旧陸軍造兵廠跡の国有地四〇万平方メートルを関係者総出で視察し、大学キャンパスの将来像としてふさわしいことを確認した。

該地払い下げ折衝の積極化について維持委員会の了承を得た当局は、小沢・宮崎両教授の協力により東京財務局浦和支部やGHQ埼玉軍政部への交渉にあたった。昭和二三年四月開催の維持委員会では、上福岡移転に伴う経費の捻出に関連して、白山校地の売却のことまで真剣に論ぜられた。

しかし、肝心の該地入手の見通しがつかないところから、二四年度は原町の現在地で新制大学を開設し、土地解放の許可あり次第上福岡に移転するという両様の構えを整えて文部省に認可申請することとなった。このことは七月の維持員会で了承を得、各課総動員で昼夜兼行、夏休みを返上して申請書の作成にあたった。

本件については、翌二四（一九四九）年二月の文部省の審査の結果、施設資金面等から見て、現状の環境においては文学部のみの設置を認め、他学部は保留となった。

待望久しかった木造二階建校舎一〇〇〇平方メートルの完成をみたのは二四年六月だった。一二の教室からなる戦後はじめての新校舎の上棟式では、盛大な餅投げをして学生たちに蘇生の思いを与えた。

建設費は、戦災復旧費として文部省から割り当てられた長期借入金だけでは賄えず、前年度から徴収した学生一人当たり年間一〇〇〇円の復興費を充当した。

この校舎建設で教室にかなりの余裕ができたので、職員も増えて手狭になった事務室の拡張分として大講堂一階の一部の教室を充てることとなった。

二 経営陣の苦悩

1 小林学長就任と獅子吼会の経営参加

青草薫る高台に杉の香かぐわしい新校舎が完成して、昭和二四年の新学期を迎えた白山台は活気に満ちていた。図書館の外壁にからみついた蔦も新芽をのびし、大講堂下の崖には名も知らぬ灌木が枝をひろげていた。西校舎屋上から見たす巣鴨駅までの一面の焼跡にも、ちらほら建ちはじめた色とりどりのセメント瓦葺の民家が望見された。

このような外界の薫風とは裏腹に、学長以下三学監、会計課長といった経営陣は、教職員の給料支払の財源の捻出に四苦八苦していた。大学は借金で首が回らないというのではなかったが、常時の運転資金にここ三年来窮していたのである。当面、校舎建設の支払残額と七・八月の俸給支払いに三〇〇万円の現金が絶対に必要だった。

三学監はいずれも大陸帰りで、内地での金策の手蔓に乏しかった。時あたかもインフレの混乱期で、戦災学校の復

興に投資する会社は絶無だった。窮余の一策としてもちかけた財団の役員である維持員からもその道筋は得られなかった。

学監は手分けをしてめばしい卒業生を歴訪して寄附集めに努力し、奇特的な財界人の物色に奔走したが、梨の礫の悲哀に終始するしかなかった。

こうした苦悩の中で目をつけたのが、卒業生で千葉新聞社社長の小林啓善だった。成石学監は、千葉在住の平野教授の仲介で、支那哲学東洋文学科先輩の小林を訪ねて母校の窮状を訴えて協力を要請した。成石の真情に動かされた小林は、日頃社会事業に浄財を投じている獅子吼会会長の大塚日現に目星をつけ、しばしばその門を叩いて母校の援助救済方を懇願した。

その後、獅子吼会との交渉は、小林を介して大学維持員の岡村二一（東京タイムズ社社長）と高盛義雄があたり、相当複雑な経緯を経て極秘のうちに進められた。

獅子吼会の経営参加のからむ小林学長就任を審議する同年九月の維持員会で、さしも温厚篤実な加藤学長も、「大学の再建を果すのは金の力ではない。最も大事なことは人の和である」と発言して学長の辞意を表明した。

同年一〇月、第一七代学長兼理事長に就任した小林啓善は、名実ともに大学を代表して正式に獅子吼会と交渉を進め、両者の意見が一致したので大塚会長は大学の再建に乗り出すこととなり、一一月、大塚日現を名誉学長として推戴した。

大塚名誉学長は、昭和二四年から二九年にわたり戦災で焼け爛れて雨漏りのはげしい大講堂・図書館・西校舎等の改修に八四五万円をつぎこまれた。これがいわゆる獅子吼会に対する大学の恩借となり、二七年三月、同会派遣の理事大塚又七が理事長就任という道程を進むのである。

大塚日現が東洋大学を援助した真意は、学祖の護国愛理の建学の精神が法華精神と通ずるものがあり、東洋大学を復興させ日本の再建に役立つ人材を養成する機関とすることが、国家に対する御奉公であるとともに、明治仏教界の偉人、哲学者井上円了の霊を慰めるゆえんと考えたところにある。

2 躍進と激動、頻繁に更迭される理事長

昭和二四年の審査で保留となった経済学部を設置認可を果すため七月から再申請の具体的措置を講じ、新たに向井鹿松・檜崎敏雄・松本信次・井上貞蔵・井関孝治・中川友長・西田卯八らの諸教授を招聘し、昭和二五（一九五〇）年四月、経済学部第一部ならびに短期大学部第二部を開設した。

翌二六年三月、従来の財団法人東洋大学財団から学校法人東洋大学に組織変更の認可が下りた。それに至るまで、同一財団の京北中学・京北実業との合併について三年有余にわたって維持員会で熱心に審議を重ねたが、ついに一致点を見出し得ず、財団合併以来四〇余年におよぶ親子関係の親密さで提携してきた両校が、ここに完全に袂をわかつこととなった。

同年四月、文経学部第二部を文学部第二部と法経学部部に改組増設し、大学院文学研究科修士課程を設置した。

二七年五月小林学長は辞任して、加藤精神が第一八代学長に就任した。焼夷弾に焼かれて、「白山砂漠」と呼称されていた西校舎の床や壁の大修理も行われ、大学院開設に伴う研究棟の建設準備がはじまった。

二三年に一〇〇〇名をわずかに上回っていた在学生が三〇〇〇名に増えて活気をおびてきた。創立以来文学部一本の教授会も、経済・法経・第二文学部と学部別にもつようになると、長い伝統をもつ家庭的な魅力も失われて次第に複雑化し、事務局の組織機構も徐々に改革されていた。

その事務局も、戦後草創の頃から継承されていた庶務・教務・学生・会計・図書課のほかに補導・厚生の一課が增设されて学生生活・福利厚生を重視した機構に拡充し、事務職員も次第にふくれあがった。いきおい事務室も大講堂一階の三教室を使い、廊下突き当たりで会計課が入るようになった。

昭和二十九年四月、経済学部経営学科を増設し、大学院文学研究科博士課程を開設した。学部学科や大学院研究科等の設置に際しては設置準備委員会を設け、カリキュラムや教員組織の拡充強化については教授委員が精力的に活動し、文部省折衝の窓口は施設設備、財政問題をも総括して教務課が担当するのが慣行になっていた。後の経営学部の基礎となる経営学科の増設は、日本ではユニークな学科であっただけに教員組織の面で難産であった。教務課長は、文部省の廊下薦のように頻繁に通い、審査会の情報収集で深更におよぶこともあった。

同年一〇月、大学院研究棟（四号館）が完成して研究と教育の府としての第一歩を踏み出したのであるが、前年暮から獅子吼会との紛争が些細な事件をきっかけとして起こっていた。その事件は、三カ年近く理事長として大過なくその任務を果たしていた大塚又七が、自動車購入問題で不明朗な点があつたにすぎない。しかし問題は、獅子吼会という宗教法人が学校法人東洋大学の役員の半分を占めていたことから、それは学祖の遺訓に抵触するばかりでなく、大学乗っ取りだとの疑念を抱かせた点である。

二十九年に入ると、校友会ならびに経済学部・文学部教授会が理事長退任を決議して迫り、同年十二月、常務理事国井淳一（校友・西義雄（教授）、獅子吼会選出の理事岡本喜一・平野利・塚本秀進および学長たる理事加藤精神等からなる理事会が総辞職したのである。よって寄附行為にもとづく学長・理事選考規定に従って選考を重ね、翌三〇年三月の評議員会で承認された。

ついで翌四月八日開催の理事会で学識経験者たる理事選考の際、会側の岡本・平野両理事と校友側・教授側の理事

とが意見対立して岡本・平野両理事が退席したことに端を発し、以来大学側と獅子吼会側双方は、それぞれ東京地裁に提訴したのである。

三月松本信次が理事長に就任し、東洋大学三原則（学祖の遺訓を遵守すること。私立学校法に基づき経営すること。真正寄附行為を実施し、その施行規則を改正すること）の履行と大学本館の建設ならびに法学部設置を主張した。さらに学生漸増を背景とする強気とそれへの期待が裁判所の和解勧告を打ち切らせ、係争を尖鋭化させた。

しかし、期待された松本理事長は七カ月で退陣して西川悦蔵（校友）と替わるが、訴訟はいつ果てるともなく続いていて金融を妨げることはなほだしく、財政上金融の行きづまりで三二年七月、在任九カ月で西川理事長も退陣を余儀なくされた。

右訴訟は、三二年四月、竹村吉右衛門（安田生命保険相互会社社長）の公正適切な居中調停によって和解が成立した。

第二章 総合大学の基盤固まる（昭和三一年～昭和四一年）

昭和二九（一九五四）年七月、朝鮮事変が終ると、特需ブームで水ぶくれしたわが国の経済は、さっそくその反動に見舞われた。しかし、アメリカの日本を基地化するという条件つき援助によってなんとか乗り切ったわが国は、その後、神武景気、ナベ底不況、岩戸景気といった景気の変動を繰り返しながらも、次第に今日の繁栄につながる経済成長へと進んでいった。

三〇年ごろからはじまった技術革新と産業の近代化によって、わが国の経済は、「もはや戦後ではない」といわれるほど成長をとげ、国民生活も大幅に改善されていった。

当時の合理化の中心は、マスプロ・マスセール体制の確立という点であり、また、電子計算機の活用が時代の先端を驀進し、企業規模が大きくなるにともなって、それに即応した組織づくりや内部体制の強化が要求されるようになった。

三九年後半から四〇年にかけて、わが国の経済界は不況が深刻化し、いわゆる黒字倒産までおこり、企業の倒産数は戦後最高といわれるほどになった。しかし、その秋から景気回復に転じて以来、四七年まで、「いざなぎ景気」を味わった。

一 法学部設置と川西体制の破局

まさかと思われた法学部が、昭和三一（一九五六）年四月に開設をみたことは東洋大学の前途を占う壮挙であつた。教員組織の編成に東奔西走した一ノ瀬長治教授の活躍は目をみはるものがあり、また、認可申請書の提出期限ぎりぎりまで持ち込まれる教員組織の書類作りに全職員一致協力して徹夜を重ねた労苦は並大抵のことではなかつた。

松本理事長によつて着工されたエレベーター付、塔屋のある本館（五号館）が、四聖の像を掲げて六月完成して学生、教職員に生気を蘇らせ、本学がその後の大発展を果たす一転機となつた。

法学部設置と学生募集の遊説に活躍した川西正鑑経済学部長は、七月に理事長に選ばれたが、加藤学長の逝去により一〇月に学長事務取扱を兼務することとなつた。

昭和三二年四月、経済学部第二部を増設して学生は五〇〇〇人に達し、獅子吼会の協力体制による新経営陣が成立した六月、川西正鑑が第二〇代学長に就任した。しかし、この学長就任をめぐつて理事・文学部長斎藤响との間の確執が深刻化していった。

大学は、係争二カ年の空白や予算を無視した本館の増築、講座の増設等により一億数千万円の赤字を出していた。当局は週一回の理事会を開いて財政の立て直しにとりくんだが、七月の教職員の給料の遅配欠配がおこつて学内は騒然となつた。八月二日の評議員会は、教学の刷新と三二年度予算から教職員の人件費の二割削減を決議して教職員に要請する形をとつた。

各学部教授会は、「専任教授連合会」を組織して理事会に対抗し、九月に入ると専教連は川西学長兼理事長の辞職勧

告を決議して学生も巻きこまれるまでになったので、毎日のように都下の新聞をにぎわした。

さすがの川西も、翌一〇月一六日の評議員会で理事長の辞意を表明し、十一月一四日の評議員会で辞任した。この日、学識経験者たる竹村理事は辞任して大嶋豊が理事となり、大嶋が理事長に互選された。

獅子吼会との係争の和解調停のために第三者的に理事に就任していた竹村は、「見とおしがなく行き当たりばったりで資金計画もない。校舎は別にしても、債権者に前もって断わることもせずに不動産に金を投ずる（荒川沖土地購入を指す）やり方はよくない。一方、教授が学長に反抗したこの状態のまま運営されては不安である」と述べ、「処すべき法を知らない」と辞任してしまったのである。

しかし、竹村は債権者の立場もあつて、安田生命保険相互会社の常務を多年つとめた国大後輩の増田六郎を目付役的な任務を含めて大学事務局の新設財務室参与として春から勤務させていた。

戦災復興に立ち上がったころの事務局管理職であつた成石学監、林教務課長、神作図書課長等は、獅子吼会が大学経営に参加した直後に退職し、残留しているのは愛沢元学監と柳井元会計課長しかいなかった。その後、野口正之教授兼学生課長、丸衛治庶務課長、水越巖渉外課長、四元義正学生課長が補強された。

二 大嶋豊体制の登場——社会学部増設から工学部設置準備へ

昭和三二（一九五七）年一月の創立七〇周年記念式典は大嶋理事長のもとで厳粛に挙行されて、学園は平静にかえるかとみえたが、専教連は川西学長の辞任を追求してやまなかった。大嶋理事長は川西学長の辞任を要請するとともに、専教連の中心的教員である八教授の辞職勧告となり、校友会が中に入って調停し、八教授中六名は退職したが、

斎藤响、千野国丸両教授は解職となり、以後二カ年にわたる訴訟となった。

大嶋理事長就任と同時に遅れていた教職員の給料も支給され、さらに、獅子吼会との係争の終止符ともいえる寄附行為ならびに同施行規則の改正が、三三年四月の評議員会で議決された。この件は、「この法人に関係ある学識経験者のうちから六名」とある理事のうち「三名は獅子吼会から選出する」と明確になった点で、同年六月、その改正が文部大臣の認可を得るに至った。

かねてから川越市当局の協力で進められていた同市鯨井の土地二万六〇〇〇余平方メートル購入の件も同年一〇月の評議員会で可決され、学内も久方ぶりに明るさを取り戻し、大嶋理事長の雄大な再建構想の実現を期待するようになった。

こうした動きのなかで、鮎川義介名誉総長推戴式が一月一日大講堂で挙行された。尾張真之介校友会長、各学部長、教職員、学生で埋めつくされた壇上で、大嶋学長は興奮した面もちで「推戴の辞」を述べたのち、鮎川は東洋大学名誉総長を受諾し、大学発展のため理工学部をいち早く設立するように努力するという挨拶を行った。

社会学部設置

昭和三三（一九五八）年一二月、大講堂地階にテレビスタジオを開局して社会の耳目を驚かし、翌三四年三月に本館西側に五階建校舎を連結して延べ五〇〇〇余平方メートルの教室兼研究室が完成した。四月、文学部社会学科が発展的に拡大強化されて、わが国で最も新しい社会学部一・二部が設置され、あわせて東洋大学教養部が発足した。

社会学部設置については、米林富男主任教授以下の活躍と林恵海教授の指導助言によって社会学科・応用社会学科（マスコミ・社会心理・社会福祉・図書館学の四専攻）のカリキュラムを組み、学部長候補に東京大学から千葉雄次郎教授、大学院研究科委員長候補に金沢大学から再度田辺寿利教授を迎えることに成功した。また、北海道大学から鈴木

柴太郎教授を招くことも実現したほか鉦々たる教員組織を揃えて、大学設置審議会を難なくパスしたのである。

工学部設置準備

文科の単科大学として六〇年、戦災の廃墟の中から総合大学の構想を立てて再出発した本学は、経済学部について法学部・社会学部を増設して社会科学の領域に出たが、時代の要求する工科の設置にまでは思いもおよばなかった。猫の額ほどの白山鶏声の台地にしがみついている人々には、思い描くことさえできない夢のような話であったのだ。

大嶋理事長・学長の工学部設置の構想は、理事斎藤貢によって中政連会長鮎川義介の後援を得ることができるという確信をえたことで大きな力となった。よって大嶋は、川越土地購入に続いて工学部設置という積極政策を押し進めるため鮎川名誉総長の幕僚として北川洋二（鮎川氏義弟）、村山威士を理事陣に加えた。

日本油脂社長、日産自動車社長で追放解除後、理研の基礎を築いた村山威士によって、次の教授陣容が整備された。大越淳（精密機械）、山下英男（電気工学）、岡俊平（応用化学）、平野静雄（分析学）などの教授のほか新進気鋭の助教として上原邦雄（機械工学）、佐藤亮策（電気工学）、赤星亮一（応用化学）を八月末に内定した。

これらは東京大学第二工学部ともいえる優秀な陣容であり、同年九月末日、工学部設置許可申請書を文部省に提出したのである。

だが、積極果敢な大嶋の登場はここまでであり、大学設置審議会総会の工学部開設否決と鮎川名誉総長の失脚という不運が襲ってこようとは誰も想像できぬことだった。

設置基準を遙かに上回る広大な校地があり、いかに優れた教員組織を整備しても、教員が研究をし学生を教育するに足る実験室と機械器具が備わり、金のかかる工学部の運営を賄うだけの財政的基盤の確立がなければ設置認可は至難のわざとなるのだ。

審査の過程のなかで、カリキュラムや教員組織、施設設備を担当する大学設置審議会で、「こんな優れた教員組織をもつ工学部を否決して日本のは恥となる」と発言する委員が出たりして満場一致でパスさせたことが、主として財政問題を審議する私大審議会の反発を買う結果となり、翌三五年一月の総会で、工学部の開設は否決されたのである。一方鮎川義介は、三四年春に行われた総選挙で発生した子息金次郎の選挙違反事件で国会議員を辞し、その他いっさいの公職をやめて、九月末、東洋大学名誉総長をも辞任すると申し出た。このことは、本学にとっても不名誉な事件となったが、大嶋理事長には致命的な蹉跌の重複というほかない。

三 工学部・通信教育部・経営学部を設置

第一次事務局組織機構、職制改革

昭和三五（一九六〇）年三月、事務局組織機構を一部改正し、部長制を設けて部長は常務理事につながる体制とし、管理職の異動が四月一日付で次のように発

令された（表一）。

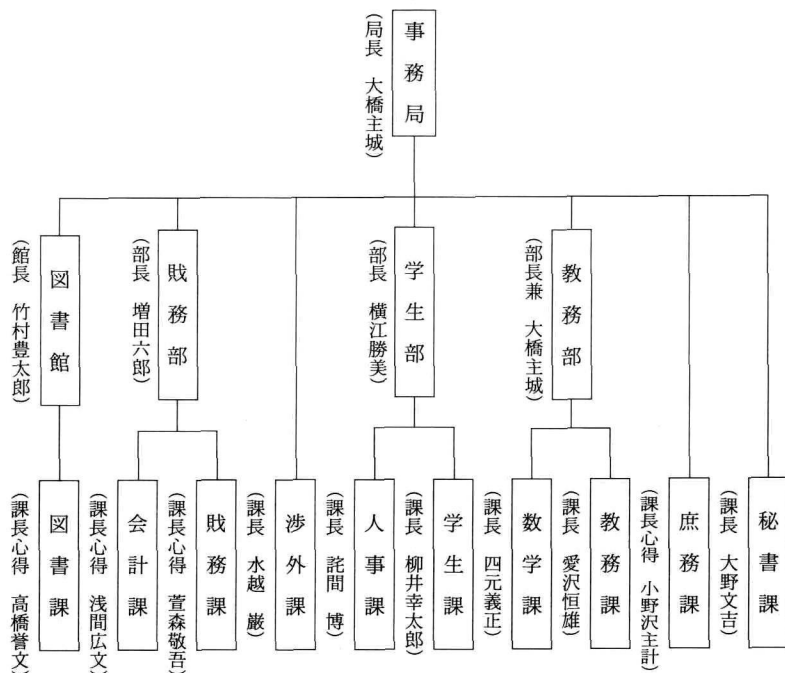
工学部設置認可に向けて

昭和三五年四月、すでに内定していた大越・山下・岡教授、上原・佐藤・赤星助教授に加えて外山修之教授、一瀬正助教授の八名が東洋大学専任教員として発令されたので、毎日出勤して本館二階の準備室で建築中の工学部本館の実験室や研究室の詳細な仕様書の作成や開講準備に取り掛った。

六月、工学部教養課程の木造校舎三棟が完成した。

九月末文部省に再提出した工学部設置認可申請書にはさらに強化された教員組織が追加されたので、問題は、私大審議会が追及するであろう大学の財政強化と理事陣容にしばらくられているようだった。

表-1 事務局組織 (昭和35年4月)



一〇月、工学部設置準備委員会事務局が設置され、秘書課長から配転の大野文吉がその責任者となり、高橋貞一・添野二男ほか若干名の構成で審査会の情報収集や川越教養校舎での開講準備に当たることとなった。

前年度の工学部開設否決は、理事会を総辞職に追いこむこととなり、各理事は揃って辞表を提出した。しかし、大嶋は、「理事は辞めても学長として居残って工学部設置を果したい」と、辞めないままで時日を重ねた。

この状況のなかで、金融界は大嶋理事長による融資はきわめて困難と判断し、ついに東洋大学への融資を中止してしまった。理事会は、新経営陣を迎え入れようとの態勢を堅持し、大谷壠（学識経験者）・小野教孝（校友）両常務は、出勤しても本館二階の理事長室に入ろうともしなくなった。

大嶋学長は、その熱意と執念とを自ら描いた

工学部設置に置いたままその地位を固守していたが、ついに金融は梗塞して一二月の給与は遅配となった。

同月二八日、東洋大学教職員組合は臨時大会を開いて、学長・理事選考委員会、評議員会、理事会等各機関に対し、新理事の選任を速やかに行うよう決議文を提出した。

翌二月一日、大嶋理事長兼学長はついに辞表を提出したので、翌二日の評議員会で次の理事を承認した。

学長（理事）

佐久間鼎

校友たる理事

勝承夫、三沢元貫、佐瀬恒、来馬道断

教員たる理事

三田高三郎、檜崎敏雄、塚本哲

学識経験者たる理事

川西文夫、中武三

なお、同日開催された新理事会において勝承夫を暫定理事長に互選した。

勝理事長は、大島頼光・平野利両監事に協力を求め、年末をひかえた前大嶋財政の危機を乗り越えることに奔走した。

翌三六年一月開催の評議員会で、次の四名の財界人の理事（学識経験者）選任を決定承認した。

洪沢敬三（国際電々株式会社社長）

市村 清（理研光学工業株式会社社長）

竹村吉右衛門（安田生命保険相互会社社長）

迫 静二（富士銀行頭取）

松飾りがとれると、募金打合会が大手町の安田清交倶楽部で行われ、工学部設置準備委員会の教員と増田財務部長、大野事務部長が出席した。佐々木秘書室長を伴った竹村社長が席につき、日立製作所の二億円の寄附がほぼ決った旨

の朗報に続いて今後の活動方針についての話があり、毎日午前一〇時ここで顔を合わせる事となった。

五日後には大越教授から、「松下電器一〇〇〇万円、日産自動車五〇〇万円の寄附申込み」の報告があり、山下、岡、外山教授からも交渉の経過報告がなされた。

一月二〇日の大学設置審議会は昨年同様問題なくパスし、二六日の私大審議会では募金状況を見守るということになった。

大野部長と浅間会計課長は、寄附申し込みと入金のあるたびに文部省管理局振興課を訪れたが、二月に入るとそれらの金額は次第にふくれあがっていった。

勝理事長も時どき一〇時の会合に顔を出し、「理研光学から一〇〇〇万円の承諾を得たし、渋谷、竹村理事のおかげで大物理事長もきまりそうだ」と目を輝かした。三月になると、集まった寄附金はどしどし業者に支払って借入金を減らすよう振興課長から指示があり、かねてから私大審議会の主要メンバーと折衝を重ねていた竹村理事も課長に会って今後の方針等について打合わせたりしていた。

かくて、自社の業務を留守にしている二カ月余にわたる竹村社長の献身的な協力と財界、産業界の奇特な芳情によって三億七〇〇〇余万円の寄附金が寄せられた三月下旬の大学設置審議会総会は、東洋大学工学部開設の件を全会一致でパスさせたのである。

技術革新と産業の近代化に向って邁進するわが国の国策に沿い、二年がかりで工学部の開設を果たして、総合大学の第一歩を踏みだしたことへの関係者の喜びもひとしおであることはいままでもない。

大学が巨大化するに従ってその経営に困難さを加えるが、長く文学部だけで経過した本学には、学祖の遺訓を継承して経営の任につくだけの人材に不足を来すこともやむを得ないことである。

経済学部、短期大学部ならびに法学部を増設した時点で学識経験者として大嶋理事長を迎えた。豪放磊落、金は天下の回りものという観点から社会学部の増設に続いて川越に広大な土地を購入して金のかかる工学部設置の構想を立てた。鮎川義介を名誉総長に推戴して東大から優秀な教授陣容を迎え入れて次つぎと積極政策を打ち出しはしたものの、前記のような経緯のなかで追われるごとく淋しく大学を去っていった。しかし、当時の脆弱な財政状況のもとでは、石橋を叩いて渡るタイプの人間ではとうていなしえない大きな足跡を本学の歴史に残した功績は、誰しも認めざるを得ないであろう。

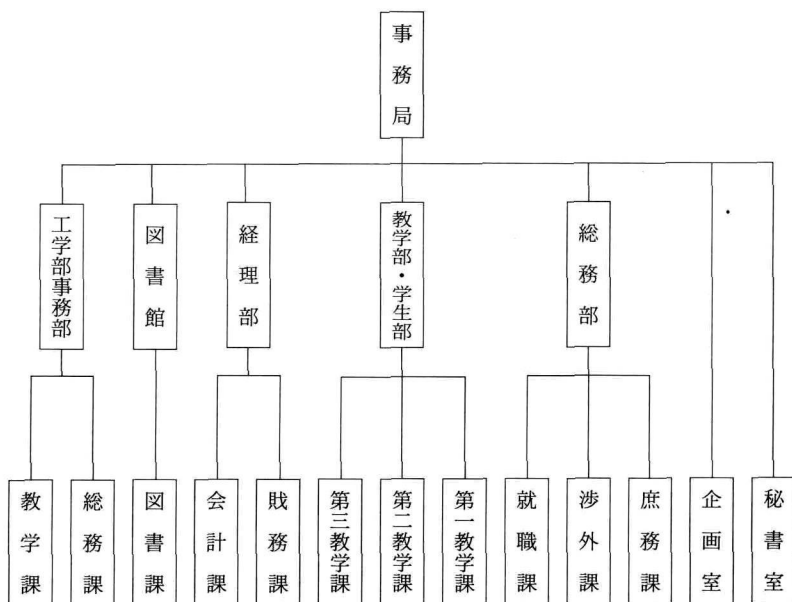
また一方、獅子吼会との訴訟の和解調停を果たしたことを契機に学識経験たる理事となり、工学部設置に前記のような献身的な働きをして大学の危機を救ってくれた竹村吉右衛門をはじめ、大局的な観点から工学部設置に支援を惜しまなかった渋沢敬三の厚恩を銘記すべきである。さらに、日立製作所以下巨額の浄財を寄附してくれた企業なども含めて、本学の優れた建学の精神と学祖の清廉潔白人柄に敬意を表してくれたものと認められるのである。

今さら付言するまでもないが、大正七年一月二八日、学祖が境野哲第四代学長宛「卑見ヲ開陳シテ御参考ニ備フ」という書簡（『東洋大学百年史資料編1・上』六三頁）の一部を掲げて、学祖の遺徳を偲ぶよすがとしたい。

拙者が明治二十年ヨリ同三十九年マデ全力ヲ注ギテ学校ヲ経営シタルハ、決シテ一身一家ノ為ニアラズ、又毫モ子孫ニ譲与スル意志アリシニアラズ、全ク国家社会ニ貢献スル本意ナルコトヲ天下ニ明示セント思ヒ且ツ其間拙者が一銭一毛オモ私セザルコトヲ明白ニセント考ヘ、創立以来ノ帖簿ト財産トヲ挙ゲテ之ヲ後継者ニ引渡シ、財団法人ヲ設立シ、其評議員中ニ拙者ハ勿論家族モ親戚モ一切加ヘザル方ガ公明正大ナラントノ卑見ヨリ……

昭和三六（一九六一）年四月一日、勝理事長は辞任し、劔木亨弘が理事長に就任した。工学部の設置認可が三月末と遅れて学生募集期間がずれこんだので、同年一〇月に工学部本館の落成式を兼ねて工学部開学式が盛大に挙行された。

表-2 事務局組織（昭和37年5月）



翌三十七年四月、工学部に土木工学科、建築学科を、また経済学部にも商学科を増設した。

第二次事務局の組織機構改革

昭和三十七年五月、事務局の組織機構の改革が行われ、企画室、総務部、学部ならびに工学部事務局が設置された（表12）。

通信教育部の設置

学祖井上円了が哲学館時代に、

『哲学館講義録』を発行して勤

労学徒の研究に資したのが本学通信教育の創始であり、このたびの通信教育部の設置は、その復興である。

早くから他大学の通信教育部の内容、運営等について調査研究を加え、本学の伝統ある文学部国文学科で大学教育の門戸開放と教育の機会均等に寄与するため、文部省の認可を得て昭和三十九年四月から大学通信教育課程として出発した。

さらに、広範な階層の勤労者のため四一年四月から法学部法律学科を増設し、二学部二学科の通信教育部として展開させることとなった。

経営学部分離独立

昭和二九年に経済学部を経営学科を増設し、三七年には商学科を増設して経済学部としては相当広範囲の内容を包蔵していた。

その後、社会教育上の要請に対応し、学問の領域拡大に応じて研究体制をさらに充実発展させるため前記二学科を経済学部から分離独立させ、新時代にふさわしい経営学部として昭和四一（一九六六）年四月から開設した。

開設にあたっては、新たに学界、産業界の権威者を多数迎えて教員のいっそうの充実を図った。また、研究設備についても電子計算機センターを設置し、経営諸学ならびに他学部の研究教育に新機軸を創成しようと期待をかけた。

白山校舎の整備、大学院研究科の増設、短大第一部・附属高校開設
昭和三七年九月に、戦後、「一人一坪運動」などで買収し学生の遊び場になっていた空地に二号館第一期工事が完成した。中小教室主体のこの校舎の地下一階に、学生の要望に応えて集会場を設置した。

幾多の難関を乗り越えて工学部ならびに経営学部を増設して総合大学の仲間入りをした大学は、次第に出願者も増加し、低い給与ベースと遅配欠配で教職員を悩まし続けていた給与は大幅にアップしてにわかに活気をおびてきた。

一二月には、『東洋大学広報』が創刊され、『白山スポーツ』、『文連ガイダンス』も発行されるようになった。

昭和三八（一九六三）年四月には、短期大学部第一部が設置され、大学附属姫路高校、南部高校が開設された。一月に「白馬山荘」を開設し、大学祭を「白山祭」と改称して盛大に挙行され、学生生活に目を向ける大学へと変貌していった。

三九年三月、白山二号館第三期工事（地下一階、地上四階建、延べ七九〇〇平方メートル）が完成して落成式が挙行された。四月、附属牛久高校を開設し、引き続き運動部合宿所が川越キャンパスに完成し、只見川荘も竣工した。五月には工学部二号館が完成を見、この年はじめて工学祭が開催された。

四〇年四月、大学院工学研究科修士課程を開設し、七月には山中湖畔荘ができて学生のゼミやクラブ活動の場としての活用の頻度を増していった。

四一年三月、創立八〇周年記念館（地下二階、地上十階建、延べ九八〇〇平方メートル）が完成した。四月には、経営学部一・二部、大学院社会学研究科に社会福祉学専攻修士課程を増設し、あわせて法学研究科私法学専攻博士課程を開設した。

同月、短期大学部を、「東洋大学短期大学」に改組し、ここに大学六学部、大学院五研究科、短大一、附属高校三校を擁する総合大学としての態勢を備えることとなった。

同年一二月、劔木亨弘が文相就任のため理事長を辞任した。

第三章 教養課程移行で大学紛争（昭和四二年～昭和五一年）

昭和四二年度の「経済白書」は、天然資源に乏しいわが国経済の発展にとって、外国貿易は決定的な重要性をもっている」と強調したが、四〇年代の輸出の拡大は、まさにわが国経済繁栄の原動力になった。

すなわち、わが国はこの時代に世界有数の経済国となり、外貨準備高も四六年には前年度の三・五倍の一五二億ドルに達するなど、経済大国として先進国の仲間入りを果たしたのである。

しかし、四六年八月にアメリカがドル防衛策を打ち出したために起こった、いわゆるドルショックにより、四七年にかけて景気は後退した。わが国の経済が高度成長時代から一転して低成長時代へ移ろうとする四九年、産業界はあげて経営の体質改善に迫られ、深刻な不況期を迎えていた。

一 教養課程の川越移行問題で紛争はじまる。

教養課程の川越移行計画

昭和四二年一月、劔木理事長のあとを受けて、社会学部長から一転して理事長に就任した千葉雄次郎は、矢野禾積学長、三常務とともに事務局各部課からの業務報告を三日間聴取した。このなかで、昨春設置認可された経営学部の実行条件が、白山五学部の教養課程を川越キャンパスに移行しなければ校地不足問題の解決とはならないことを知り、これはたいへんだと理事長としての苦悩を深めた。

その後、事務局企画委員会の意見を聞いた千葉理事長は、矢野学長と協力して四三年度法文系五学部新入生を川越校舎で教育する方針を立て、同年九月の学内検討委員会の答申を得て移行計画を推進した。

一〇月、全学生を大講堂に集めて移行説明会をやるうとした千葉理事長は、一部学生の激しい抗議のため急遽テープ放送に切り換えて学内は混乱した。二〇日後、矢野学長は学生との大衆会見に応じて移行計画を説明したが、一月に行われた教職員組合（本組合は、川越移行白紙撤回を公表していた）との団体交渉終了直後、その部屋になだれこんだ過激派学生と増田六郎常務理事以下団交委員との徹夜会見となり、翌朝正門まで機動隊を導入して増田常務以下がやっと解放された。

同月下旬、千葉理事長は、大講堂で二時間にわたって移行説明会を強行したが、終了後過激派学生の抵抗にあい、教職員に護られて辛うじて脱出した。

一二月、千葉理事長は辞職して坂戸公隆（校友）と更迭した。

六・二八事件

坂戸理事長と三野昌治第二五代学長は、昭和四三年度川越移行を見送ることに決定した理事会の意向をうけて、四三年一月、学生を大講堂に集めてその方針ならびに創立八〇周年記念図書館と学生会館の建設促進について発表した。

同年六月、全共闘学生が東京大学安田講堂を占拠するなどの学外動乱に呼応する形で、同月二八日夕刻、多数の学生が、「学館建設を優先しろ」と叫んで二号館二階の理事室、学長室前廊下に坐りこんだ。学生部委員や学部長の説得にも応ずる気配もなく、学生たちは長時間抗議を継続した。同夜、機動隊が突入して一七三名の学生を逮捕した。この大量検挙に激怒する学生の騒動が、いつ果てるともなく白山キャンパスを震わせ続けた。

紛争つづく

昭和四三年九月、坂戸理事長が辞任し、大島昌静(校友)が理事長代行となった。大島代行と三野学長は、精力的に多くの学生と会見して、図書館と学館の建設促進を訴え続けたが、事態解決の糸口は見出せなかった。九月下旬から一・二号館の封鎖や教職員の入構を拒否しはじめ、一〇月には、徹夜で警備する教職員や良識派学生の中に他大学生と共闘で乱入するなど学内の混乱は目をおおばかりだった。

翌四四年一月、一部学生が五号館を封鎖したので、これを強制排除した上で、二月の入試は機動隊に護られての実施となった。六月、磯村英一が第二六代学長に就任したが、翌七月、「大学運営に関する臨時措置法」が国会を通過したので、その反動の混乱の收拾に意欲的に動き出した。

だが、他大学生を交えての各館の封鎖が続き、各学部教授会の積極的な学生説得も効果が出ず、事務局各部課の業務は学外疎開で行わざるを得なくなった。大学当局は、機動隊を導入して封鎖を解除する強行措置を講じたが、八月下旬には身分不詳の者の二号館封鎖があり、九月には外部学生の参加による白山通りのバリケード構築など言語に絶する暴挙が繰り返された。

一月四日から学生証確認による検問体制に切りかえ、教職員が交替で徹夜警備に当たるという非常態勢が年末まで続いた。

その後、紛争継続中の他大学を視察し、度重なる学内正常化推進本部会議の審議を経て四五年一月下旬から入構制限措置を解除する方針を固め、中央掲示板に次のとおり告示をした。

告 示

学生諸君の理解と協力により学内の正常化が期待できると判断し、入構に関する制限措置を一月二日から解除し、次のように措置する。

学年末をむかえ、学生諸君のいつそこの勉学を望む。

記

一、学生証による確認措置を中止する。
二、入構に際しての検問を解除する。

但し、正常業務の妨害、学内秩序の破壊、暴力行為等発生の場合は直ちに排除する。

三、自動車の乗入れについては、当分の間現行どおりとする。

四、火災予防を含めて夜間の警備の万全を期するために、午後一〇時から午前八時まで立入りを禁止する。

五、入試時には受験者と業務関係者を除き入構を禁止する。

昭和四五年一月二〇日

東洋大学長

東洋大学短期大学長

第三次事務局の組織機構改革

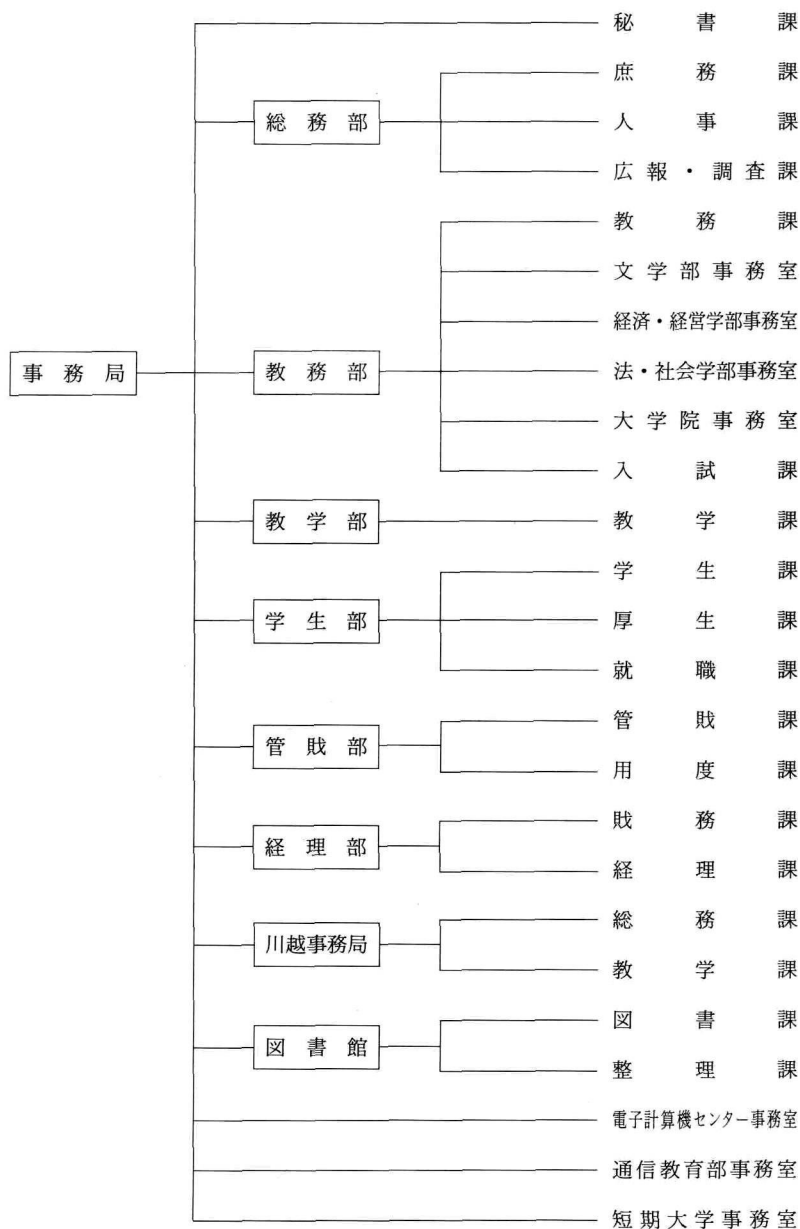
昭和四五年一二月、三次元貫は理事長に就任し、常務陣は、石川知治(学識)、吉田隆(校友)、清水虎雄(教授)で発足した。

同月職員組合が結成され、四二年六月教職員組合から分離独立した教員組合を含めて労働組合が三つになったわけである。

前年四月の部長会で、三次常務から、「大学の体質改善のため事務局の機構改革を中心に四六年四月実施をメドに調査研究すること」との指示があり、寄附行為の改正を含めて部長会を中心に検討に入り、全職員の衆智を吸収した原案を理事長に答申し、四六(一九七二)年七月一日から次のとおり実施することとなった(表一三)。

なお、四六年四月一日現在における学校法人東洋大学の規模は次のとおりである。

表-3 事務局組織（昭和46年7月）



- 1 土地 三五万六六三三平方メートル
- 2 校舍等建物 七万六八三〇平方メートル
- 3 蔵書数(除附属高校) 二八万冊
- 4 教職員・学生・生徒数

大学・短大	三八一	四四〇	二八二	二〇〇〇〇
専任教員				学生・生徒
兼任教員				
専任職員				
附属高校	九五	四七	二三	三〇〇〇

二 白山五学部教養課程の朝霞キャンパス移行

朝霞校地の買収 大学は、人文・社会・自然の六学部をもつ総合大学の形はできたが、法文系五学部は校地問題を

棚上げにしたままで、天下に通用する公正な学部とはいえないことは関係者はみな熟知していた。

しかし、今後果たすべき課題は分かっている、具体的にどうすればよいかの名案がなく荏苒日時を重ねていた。川越校地は広大ではあるが、遠隔すぎる上に学生の猛反対で移行中止を余儀なくされていた。一度失敗した上福岡の土地の再交渉とはいわないまでも、白山と川越の中間地点に安い土地があればよいがと、夢のようなことが漠然と話題

になるだけだった。

早くからそこに目をつけていたのは、担当の石川常務と管財部だった。そして、業者を通じて朝霞に安価で広い土地のあることをキャッチし、買収方法について秘密裡に調査を進め、明るい見通しを掴んだ上で理事会の了承を得たが、きびしい箱口令が敷かれて一般教職員には伝わらなかった。

ところが、昭和四十七年九月二十四日発行の地方新聞に、「当局、朝霞に二万坪の土地購入を進める。学部移転計画のためか?」という見出しと記事が出て、その脇に、「新学長に堀秀彦氏」という関連記事が掲載された。

四十七年七月、堀秀彦が第二七代学長に就任していたが、一〇月六日の部長会では、中間地区キャンパスに関する件が上程され、二万三〇〇〇坪の土地活用のマスタープラン、全学PR方法と審議機関等について審議が進められた。

さらに、同月二三日の部長会で、朝霞移行を含めた教員枠と長期人事計画について審議し、引き続き二七日開催の大学協議員会では、校地拡張に関する件が上程されて、学内の話題は朝霞校地問題に集中されていた。

堀学長は、白山五学部教養課程の朝霞移行問題を前向きにとらえ、白山全教職員を二号館四階の大教室に集めて説明会を実施し、長時間かけて質疑に応答した。

学生は、五年前の川越移行問題当時と同様はげしく反対して抵抗した。同年一二月末から一二月中旬までの事件一覧は次のとおりである。

日次 曜	事 件 概 要
11/27 月	白山祭実行委員会に対し、学長見解を中央掲示板に公示

第三章 教養課程移行で大学紛争

14	12	11	9	8	7	6	5	4	2	12 1	29
木	火	月	土	金	木	水	火	月	土	金	水
社会行動委中庭デモ	山下袈裟男教授授業妨害。石川・清水両常務を二号館受付前廊下に連れ出して団交（二六時一〇分〜一八時一〇分）	J戦線・現思想研中庭デモ。斎藤弘行助教授抗議中止妨害	岡田温教授・泉治典教授・桶谷秀昭助教授中庭団交（一四時三〇分〜一六時一五分）	同 右	現思想研一二名構内デモ	学長大衆会見（於大講堂）、九日の会見を予定して解散。立会い人——清水常務、大山惣寿郎学生部長、佐々木哲郎教務部長	J戦線構内デモ	J戦線・プリント系（赤ヘル）構内デモ	学生構内デモ	学生構内デモ	堀学長、二号館前庭で大衆会見

15	16
金	土
午前一一時五〇分、赤ヘル清水常務を中庭に連れ出して団交。黒ヘル六名、赤ヘル八名、一五時二〇分経理部に突入	赤ヘル中庭デモ。社会福祉研赤ヘル二名。太田勇助教授と中庭団交（一四時五分～一五時三十分）

以上の抗議の主題は、朝霞移行問題、学費改定問題であった。

大学は従前の方式にならない、学内正常化推進本部体制を復活させた。その組織機能は次のとおりである（表一四）。
四八年三月、増田六郎が理事長に就任し、八月には堀秀彦が第二八代学長に再任され、九月、岡村二一が理事長に就任した。

朝霞移行、学費改定問題の紛争は、昨年に続いて激しさを加えていたが、大学は多年の懸案事項を達成するため法人・教職員一致協力して懸命の努力を傾注していた。

朝霞校地の大部分は市街化調整区域に入っていて、幾多の制約に苦しみながらも、移行方式もほぼ固まり、校舎等建物のマスタープランも整っていった。

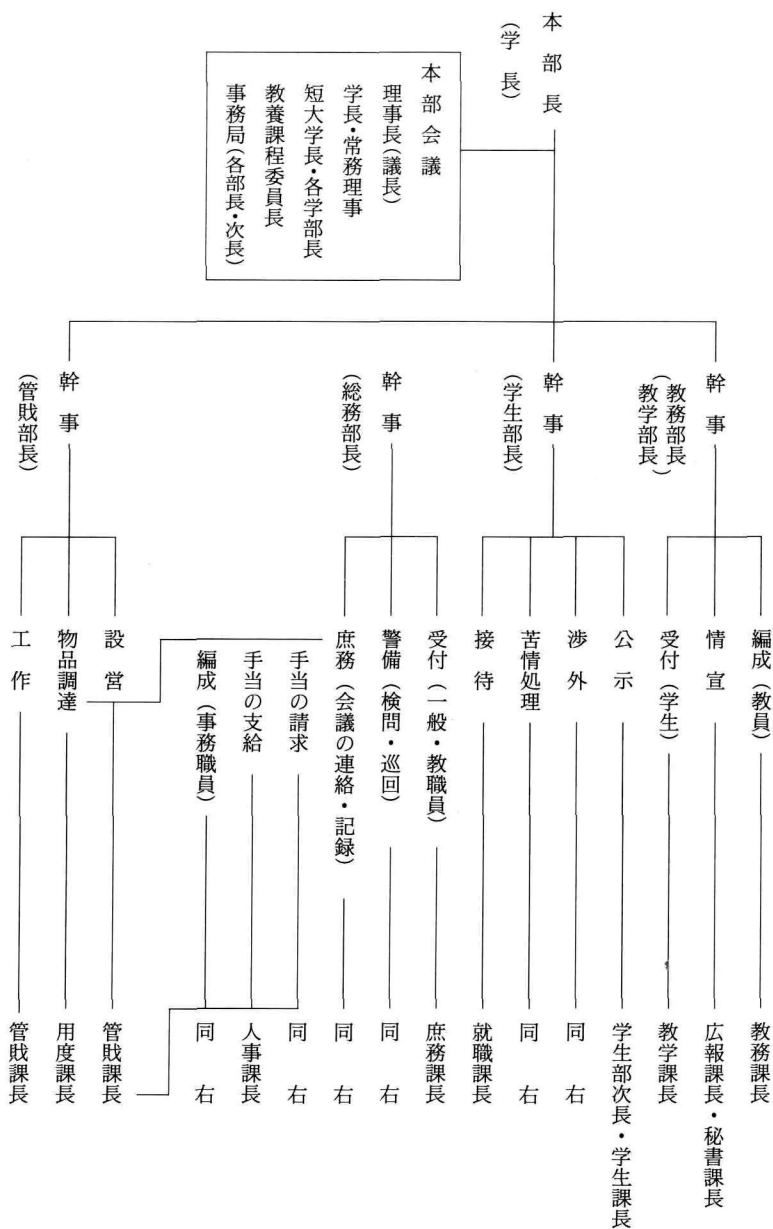
四一年度の経営学部設置認可に伴う履行条件となった中心校地問題について左記する。

中心校地問題

大学設置基準に基づく中心校地問題について大学設置審議会申合せ事項に照らして東洋大学にあてはめると、

- ① 白山校地に昼間学部を残す場合は、朝霞や川越校地とは完全に切り離して、独立したキャンパスとして必要面積を積算しなければならない。

表-4 学内正常化推進本部組織



したがって、既設の校地三割引きは適用してもよいが、基準面積の二分の一は適用できない。よって、白山残留学部は、文学部第一部（入学定員三〇〇名。文学部は履行条件はない）と経済学部第一部（入学定員一〇〇人）となる。

② 短大第一部を朝霞に移行することは、原則として認められる。この場合は、川越の運動場を活用しても差支えなく、基準面積の二分の一は適用される。ただし、短大は、都道府県をまたいだ分割設置はできない。

③ 五学部第二部、短大第二部に対する必要校地面積は、既設の割引きをしても、六万一一八六平方メートル必要である。しかし、既設学部であり、勤労青少年の救済という面もあるので、将来増員を一切考えなければ、既得権として認められよう。

④ (イ) 四学部を朝霞に移行した場合は、朝霞が中心校地となり、川越を第二校地として利用する。

(ロ) 三つの校地の関連は、法規上成立しないし、中心校地が二つあるという考え方は成立しない。

(ハ) 四学部を朝霞に移行のとき、朝霞は中心校地となる。白山は中心校地とはなり得ない。

(ニ) したがって、白山残留学部は白山に凍結し、基準面積の二分の一は適用されない。白山校地は、朝霞・川越との関係を断ち切り、独立した校地として考えられる。

(ホ) 白山残留は、履行条件のない文学部しかない。経済学部は履行条件があるので不可能。経済学部・法学部・社会学部を三〇〇人に定員増して、それらのうち一学部の白山残留は、白山校地狭隘のため困難。

(ヘ) 一つや二つの学部を朝霞に移ることに決めても、四学部移行が決まらなければ定員増は認められない。文学部と短大を現状のままなら白山残留は可能。しかし、定員増は不可能。

⑤ 朝霞に白山全学部の一・二年生を移行した場合は、白山と朝霞を合わせてこれが中心校地となり、川越を第二校地として利用する。

表-5 学則定員変更(昭和51年4月)

	現行定員	変更定員
文 学 部	300	400
経 済 学 部	100	300
法 学 部	200	400
社 会 学 部	100	300
工 学 部	420	600
経 営 学 部	100	300
短 期 大 学	120	300
計	1,340	2,600

中心校地問題をふまえての朝霞活用方式は、定員増を考えれば前期⑤によらざるを得ない方向に学内の一致をみたので、四九年度はその具体化について種々検討が重ねられた。

朝霞校地のうち南側の高台だけが市街化区域であるので、当面そこに校舎を建てるしかないこととなり、五〇年にその基本設計に入った。ところが、その市街化区域は文化財指定地であり、遺跡が埋蔵されていて、その発掘調査をみなければ建築不可能となったのである。

第一次学則定員変更

昭和五〇(一九七五)年五月、磯村英一が第二九代学長に再任され、同年七月、勝承夫が二度目の理事長に互選された。学生の朝霞移行反対闘争は依然として続いていたが、理事会や学内の諸会議は朝霞移行問題で繁忙をきわめながらも、大学経営の基盤となる学則定員変更の実現に向けて意欲的に動きだしていた。

五一年三月、定員変更届に対する文部省の实地調査があり、白山五学部教養課程の朝霞移行を実施するという理事長、学長の確約が実を結んで、同月一九日付をもって上記のとおり白山五学部第一部ならびに短大第一部の学則定員の変更の認可を得た(表-5)。

遺跡の発掘調査も終わり、五二年三月完成をメドに、朝霞一号館の建設工事は進捗していた。学費改定については、同年六月の理事会で決定し、学生・父兄に向けての説明文書の作成に入った。

朝霞移行・学費改定に 昭和五一年七月二日開催の臨時理事会は、六月三〇

かかる徹夜大衆会見 日の磯村学長の大衆会見で、「七月三日理事会が学

相談の上、七月三日の理事会との会見文書に署名した」との学長の経過報告に対し、権限のない約束は無効である。よって理事会としては、「学長の約束は越権行為につき無効である」旨を発表すればよいとの意見が圧倒的であったが、「理事長は大衆会見に出席して、学生に嘘をつかない証拠を作るべきだ」との折衷案が出たりして、勝理事長に任することとなった。

七月三日午後一時から一号館の一六〇番教室で大衆会見が始まった。スロープのついた一〇〇〇名収容席にほぼ満席につめかけた一般学生をバックに、学生代表は矢継早やに、「なぜ朝霞移行をするのか、なぜ学費改定をするのか、白山の過密は法人の責任だ。クラブ活動の分断、経済生活の圧迫だ。なぜ定員変更をしたのか。朝霞の工事中止、朝霞移行白紙撤回」を叫び続けたが、坂本市郎常務（教授）は、学生側の質問事項を区別けして、ここに至る経過について諄々と説明し、勝承夫理事長は、「大学一〇〇年の大計のための朝霞移行は断行せざるを得ない」と応えて、会場は騒然となる。午後四時、勝理事長は「老齢病弱のため別室で休養する」旨を告げて職員誘導で退席した。会見は平行線を辿りながら延々と続いて夜になった。

午後八時、父兄会館で待機していた森川久次郎理事（教授）、溝口寿美子理事（短大学長）ら三人が学生に見つかり壇上に連行される。しかし、その後の展開は予想を越えて理事側がきびしく学生に対処し、特に溝口理事は、「私は神田生まれの江戸っ子よ。あんたたちは何よ、もっとはつきりものを言いなさい」と切り出して、朝霞移行の必要性を説き続けて学生側は圧倒されだした。坂本常務は一步もひかず、夜半まで法人の姿勢を堅持し、校医のドクターストップをはさんで午前四時終了した。

一五時間にわたる大衆会見は、法人・大学の姿勢と誠実さを吐露したものとなり、爾後の朝霞移行の推進の上で有効に作動する歴史的事件となった。

磯村学長は、学長の権限を越えて理事会の大家見を学生と約束したことを深く反省し、七月五日辞表を提出したが、引き続き行われた学長選挙で再当选し、「心身ともにこの難局を乗り越えるのに無理があるが、選挙結果に見るような朝霞移行に伴う大学の危機を押しきれという教学側の支持があれば、やらざるを得ない。勝理事長が、私を使って定員増をなしとげられた重大性を改めて認識し、感謝したい」と述べ、九月就任した真溪義貫理事長のもと第三〇代学長として再スタートした。

三 大学紛争の反省と総括

昭和四二（一九六七）年の教養課程川越移行問題に端を発した大学紛争は、その後白山四学部（第一部）一・二年次生の朝霞移行へと推移するなかで一〇年の歳月を経て鎮静化に向かい、過激学生の派閥闘争に移っていった。

このことは、五二年四月、文学部を除く白山四学部一年次生の授業が、同年三月完成した朝霞校舎一号館で開始されたことによって、文部省から厳しく課せられていた履行条件を解決して、天下に通用する公正な大学としての第一歩を踏み出したことになる。

この一〇年間、教育と研究を担当する教育職員にとつては、学問の自由を阻害され続けた苦悩の日々であったと同時に、教育と研究の事務を担当し、私学の運営を支えるための人と物と金の整備にあたる事務職員にとつても、防禦の手立てのつかない不法進入に備えて業務の学外疎開を余儀なくされた苦難の日夜であった。

この長い年月の間、歴代学長を頂点とする各学部長、学科主任ならびに教員諸氏は、卒業生であるか否とにかかわらず、国家権力の行使を極力避けながら辛抱強く学生の説得に当たり、一致協力して大学護持の情熱を燃焼させ続

けたことは創立以来初めてみる壮挙であつた。そのなかで、紛争解決のための極度の疲労が遠因となつて、天与の寿命を縮めた方々もかなりの数にのぼつたことを忘却することはできない。

理事長以下常務陣、事務局部課長も長時間の大衆会見に耐えたばかりか、教職員あつての大学であるという認識を経営陣が高めたことは特筆すべきものがある。厳正な公募で狭き門を潜つて採用された昭和三七年以降の各大学出身の職員も、卒業生と力を合わせて紛争の解決に立ち向い、出身大学の情報を収集してその対策の一助としたことも評価しなければなるまい。

長期間続いた徹夜警備で、教職員一体化の觀念を自然の形で醸成されたことも、今後の大学運営のための得がたい体験として培われたことは不幸中の幸いであつた。

校友会尾張会長以下執行部が、「母校の危機は黙視できない」と、本務の余暇をさいて度たび来校してくれたし、父兄会長以下一〇〇名の会員が向ヶ丘高校に集まつて、「大学封鎖の強行は全国父兄として容認できない」と、子女の説得と奮起を呼びかけてくれたことは感謝にたえない。

他大学より一年早く始まつた本学の紛争は、燎原の火のように全国津々浦々に燃えひろがつた火の手の煽りで類焼したというより、本来的に具備すべきキャンパスの有り様から遠ざかつていたことからくる学生たちの不満を解決せずに、日月を重ねていたわけで、起きるべくして起きたものというべきであらう。でも、この長期にわたつたどきどきの逆手療法で、公的存在としての大学の在るべき姿に立ち返つたわけであり、僥倖であつたといつてよい。

この未曾有の試練を経て、教育と研究の府としての權威を復活させるために理事長以下経営陣はもちろん、教授会そのものの運営についても反省すべきいくつかの問題を抱えていることに気づいたことになる。

大学を構成する要員のなかで、教員をして心おきなくその使命を達成させるためには事務職員の任務のきわめて大

事であることが、以心伝心教員側にも理解されたであろうし、理事長以下常務陣をして大学の目的達成に遺憾なくしめるため、その補佐的役割を果たす事務局の存在価値も十分認識されたはずである。

この反省の上に立ち、黙々として業務の遂行に生涯をかける事務局職員の位置づけ、地位の向上につながる寄附行為の改正が待たれることとなる。

第四章 創立一〇〇周年へ（昭和五二年～昭和六二年）

昭和五〇（一九七五）年秋以降のイラン革命に伴う同国の石油輸出ストップなどによって、わが国経済は、五四年から第二次石油危機に見舞われたが、第一次のような混乱は起こらず、打撃は軽かった。

国家財政は、赤字国債への依存が高まり、五五年度には財政再建が最大課題となったが強力な財政テコ入れもできず、五八年までの長期不況を記録した。

輸出は、貿易摩擦が先端技術分野まで広がるなかで円安不況も短期に克服され、個人消費は住宅建設の盛り上がりや公共投資需要の増加とともに民間設備投資が呼び起こされ、景気は拡大に向かった。

わが国経済は、六二年から成長を続けるなかで輸出は増え続け、六二年度貿易黒字九四六億ドル、経常収支黒字八七〇億ドルとそれぞれ史上最高を示した。六〇年以降、対外純資産世界一を誇る経済大国に成長し、国際社会での経済的役割は年ごとに重みを増すこととなった。

一 白山四学部（第一部）一年次生の授業を朝霞校舎で開始

五年前に購入した朝霞校地は、市街化調整区域で校舎建設不可能のため、そこから少し離れた飛地の高台の市街化区域（該地は文化財発掘調査のため着工遅れる）に建設した一号館（地下一階、地上三階、延べ八六〇〇平方メートル）は、

昭和五二年三月立派に完成した。

同年四月、白山五学部のうち文学部を除く経・営・法・社会学部（第一部）一年次生の授業が一号館で開始された。学部長会議では、五学部移行の基本線は諒解していたが、文学部のカリキュラムは専門科目が一・二年次に多く配当されている上に、七学科と非常に多く分科されていて朝霞一号館のみでは授業困難であるので、早急に移行可能な施設の整備を理事長に要請することとなり、他学部と歩調をそろえられない結果となったのである。

それにしても、多年の懸案であつた移行の大部分が果たされたことは画期的であり、定員変更に伴う文部省との確約事項の実施に前進したわけで、関係者の喜びもひとしおであつた。

事務局の受け入れ態勢として、四月一日付で朝霞事務局総務課・教学課が設置されたことはいうまでもない。

事務局組織機構一部改革

昭和五二年七月には、事務局組織機構改革検討委員会が部長会を中心に発足するとともに、総務部人事課では新給与体系（職務職階給）の原案作りに没頭しだした（表1-6）。

昭和五二（一九七七）年一一月、事務機構ならびに事務分掌の一部が改正され、総務部を廃して総務企画室に、また庶務部が新設されて秘書課が秘書室にかわつた。新総務企画室の事務分掌は次のとおりである。

- ① 白山、川越、朝霞各校舎および附属高等学校の事務の総括、調整。
- ② 総合計画の企画立案。
- ③ 寄附行為その他法人の設置する学校の機構、制度、法規、事務組織等の検討。
- ④ 稟議書、決裁書の決裁にかかわる助言。
- ⑤ 学長の特命事項および学報。

表-6 身分別教職員数(52年10月現在)

		人数			人数
教 員	専任教授	185	事 務 員	主事	16
	専任助教授	106		主事補記	71
	専任講師	59		書記補	127
	専任助手	60		事務員	37
	小計	410		小計	14
事 務 員	部長	5	職 員	看護婦	5
	次長	9		技術員	5
	課長	13		現業員	18
	課(室)長補佐	16		雇員	4
	係長	22		小計	32
員	参事	1		合計	715
	副参事	7			

⑥ 理事会、常務理事会、評議員会および大学協議員会。
⑦ 学長および評議員の選挙。

また、理事長の特命事項として、

- ① 学長の権限、大学協議員会の位置づけ、教学審議会の設置等教学関係者諸会議の検討をし、ひとつの案をつくる。
- ② 寄附行為の見直し。
- ③ 創立一〇〇周年を目標とする長期、中期および短期の諸計画を立案し、総合的な大学の未来像の設定を図る。

また、総務企画室の構成員は、室長(部長)の下に主管四名(次長一、課長三)と主査(課長補佐)一名を置き、各部長は主管を兼務して主管会議の構成員となる。

同年一月には、磯村学長から真溪理事長への要望という形で、次のような学長特命事項が下令された。

- ① 東洋大学の特色を明らかにするため、歴史的基盤をもつ「教員養成」についての組織、体制のあり方。
- ② 東洋大学の名にふさわしい「東洋大学学術交流センター」(仮称)を東南アジア(たとえばシンガポール)の大学と提携して設置し、人的、学問的交流を実現する方策の作成。
- ③ 井上円了学祖全集刊行計画の推進。

右特命事項については、総企室主管の間で分担を決め、室内主管会議で慎重な検討を加えながら長期間かけて原案の作成に当たり、主管会議に諮って一つずつ答申していった。

五三年六月、創立九〇周年記念事業のひとつとしての浦水会館が完成し、続いて朝霞第二次開発行為が埼玉県の開発審議会をパスしたので、八月着工して翌年三月までに自然科学研究棟（二号館）として完成させるべく突貫工事が始まった。

右に準拠して、朝霞二号館建設に伴う二年次生の受け入れのための事務組織機構の見直し等に関する総企室内主管会議や全体主管会議が連続して行われた。

五四年三月、朝霞二号館（地下一階、地上三階、延べ一万五〇〇平方メートル）が完成し、四月、経・営・法学部一・二年次生ならびに社会学部一年次生の授業が朝霞校舎で実施された。図書館学専攻をもつ社会学部は、図書館がない関係で二年次生は白山校舎で授業実施となったのである。

同年九月、磯村英一が第三一代学長に再任され、翌一〇月、増田六郎が二回目の理事長に就任した。一二月、総務企画室が企画室に改組され、同室事務分掌第四号・第五号ならびに第七号については、秘書事務室に移管された。

五五年四月、柳井幸太郎が理事長に就任した。柳井は事務局出身だけあって、同月中旬には、「事務機構に係わる電子計算機システム体制の立案について」を部長会に諮問し、翌五六年七月、事務機械化検討委員会の第一次答申がなされた。

同年一二月、理事会内に理事をもって組織する寄附行為改正委員会が設置された。

二 東洋大学研究・教育長期計画特別委員会を発足

創立一〇〇周年を八年後に控えた増田理事長は、「本学の現状をふまえて長期計画を樹立するにあたり、建学の精神の顕揚と白山・朝霞・川越三校地の効率的な活用を図るとともに、創造的で個性ある総合大学としての教学の基本構想は重大かつ緊急の課題である」として教学側に対し、さきの「東洋大学研究・教育長期計画特別委員会」の報告書（昭和五十一年一二月付）を踏まえて、「教学に関する長期構想の立案」を要望した。

これに対し、大学協議委員会の中に設置された右特別委員会は、数次にわたる審議を経て五十五年三月二八日開催の大学協議委員会に藤木三千人委員長から報告があり、即日同委員長から磯村学長に答申された。

答申を受けた磯村学長は、この答申の内容は中間的なものにつき、さらに具体化するための機関として、「研究・教育学習長期計画実行委員会」の早急設置などを強く要望する意見を付して増田理事長に、「研究・教育長期計画特別委員会答申報告に関する件」として報告された。

このたびの特別委員会報告書の概要は、長期計画の基本方針を①既存各学部 of 拡充。②本学建学の精神にもとづくと同時に流動する現代社会に即応できる新学部の設置とし、その実現にあたっては、学校法人機関と大学諸機関との間で真剣に相互調整されなければならない次の具体的案件があると指摘している。

- (一) 水増し入学の解消のため、入学定員増をして、白山五学部（第一部）は、朝霞・川越・新校地に展開する。
- (二) 第二部進学者の約三割が勤労学生にすぎない傾向に鑑み、現行一・二部体制を廃止するとともに、白山に主として社会人のための生涯学習学部（午後～夜開講）を新設する。

(三) 学生の学部内学際学習を推進するため可能な限り、学科たて割制をコース専攻制に改める。新学部学科増設の場合もこの点を配慮する。

(四) 教員志望学生の学習を充実するため、教養課程教員ならびに教職課程教員を統合し、高校、中学、小学校、幼稚園など学校教員養成学部（教育学部ないし学芸学部—仮称）を新設するとともに、各学部教養課程ならびに教職課程教育の総合センターの機能を併せもつものとする。

(五) 以上の理由により大学設置基準を参考として各学部学科専任教員の実数に見合う学生定員増を計るとともに、専任教員を拡充する必要がある。

(六) 上記各項を検討し実施するために、法人機関と大学機関の代表者によつて構成される長期計画実行委員会を設置する。

(七) 短期大学、大学院、研究所、通信教育部については、計画実行委員会においてさらに具体的な構想およびその実施方式が立案されることが望まれる。

これらの案件は、学長が要望されている「委員会」で、今後さらに検討が推進されると思われるが、この中から生まれる諸施策は、創立一〇〇周年を経て、二一世紀へ向う本学の社会的責任を問うものになるものと期待される（——この報告書は、全教職員に配付）。

以上の報告を受けた法人理事会は、「東洋大学研究・教育学習長期実行計画委員会」を設置した。

研究・教育学習長期実行計画委員会は、同年五月に開催され、次のような結論となつた。

「大学の人的・物的諸条件の整備を前提として、学生実員の定員化をはかる。これは、大学の教育・研究水準の向上につながるとともに、本学の財政の安定化に寄与する。その実施には、現有三校地の有効的な利用とともに、新しい広大な統一キャンパスの建設もありうる」

右のような問題の検討のため、委員会に教学制度と校地建設の二つの専門部会を設置した。教学制度専門部会では、学生定員確立に伴う教職員の補充、夜間部の充実、新学部を設置等が討議され、校地建設部会では新校地の選択も含

めて検討が進められた。

これらは、全体委員会に報告検討の上、全学的な合意(学部教授会での討議も含め)を経て完成する。なお、この構想には、大学一〇〇年の記念事業との関係もあるので、その面との調整も計る段取りとなる。

三 東洋大学創立一〇〇周年記念事業委員会を設置

昭和六二年度に創立一〇〇周年を迎えるに当たり、これを記念して記念事業の構想を具体化し、教育・研究のいっそうの充実を図り、社会の要請に応えるため昭和五五年一月、創立一〇〇周年記念事業委員会が発足した。

同委員会の基本的目標は、

- (1) 記念事業にふさわしい教育・学術振興策の計画。
- (2) 長期的展望に立脚した施設計画。
- (3) 記念式典および記念出版。
- (4) 必要資金の有効な募金計画。

等であるが、この基本的目標の具体化を推進するために、「記念事業計画委員会」(委員長坂本市郎常務理事)を設置し、記念事業の推進に取り組むことになった。また、記念事業資金の募金活動の推進および記念事業計画の実行にあたる「記念事業委員会」(委員長岡本巧常務理事)を設置し、準備に入ることとなった。

記念事業計画委員会は、数次にわたって審議を重ねた結果、当面、つぎの事項を創立一〇〇周年の事業計画として立案した。

① 創立一〇〇周年史の編集発行。

② 記念論文集の発行。

③ 教育・研究の国際交流の制度化。

④ 記念棟の建設。

⑤ 記念映画の製作。

⑥ その他（記念写真集、校友名簿）

この計画は、同年九月の記念事業委員会に提案し承認された。よって、この計画を実行に移すため、専門の事務局を設置して推進していくこととなった。

徐々に各キャンパスの整備も進み、昭和五五年から五七年にかけて、徐々にではあるが、各キャンパスの整備や野学生生活に明るさ蘇る 外寮の建設が進められていった。

白山では装いも新たにLIL教室が完成し、旧七号館を解体して大講堂の改装も終わり、学生クラブ室や集会場として提供された。

工学部七号館（情報処理教室）も竣工し、運動部の合宿所や白馬山荘新館も落成し、新たに稲取セミナーハウスも開設した。

大学は、地域に根を下ろした朝霞市民講座を開くとともに、白山二部学生や朝霞校舎での学生生活アンケート調査を重ねて、学生に目を向けた姿勢を打ち出して、学生たちの目に明るさを取り戻していった。

余暇を活用しての磯村学長や柳井理事長の神宮球場への応援も続くなかで、五七年春季東都大学野球リーグで優勝し、箱根駅伝も久方ぶりに六位となった。紛争時代には思いも及ばなかった川越総合グラウンドでの体育祭も盛大に行

われ、大学祭や工学祭も復活した。

こうした大学当局、教職員挙げての学生への思いやりは、五七年度新入学生の平均三二%の学費改定も大した抵抗もなく実施されていた。

昭和五七年九月、三期一〇年の長きにわたって大学紛争をはじめとする苦難の日夜を健闘しとおした磯村学長は辞任して、工学部の西忠雄が第三二代学長に就任し、同年二月、石川知治が理事長に就任した。

四 寄附行為改正

本法人の寄附行為は、昭和四八年六月にかなり大幅な改正を行ったのであるが、六二年に創立一〇〇周年を迎えることでもあり、これを機会に改めて創立者の建学の精神をふりかえり、これからの大学のたいなる発展をめざして学校法人全体の活性化を図り、第二世紀に向けての基礎固めとする必要に迫られた。

よって五五年一二月、理事会内に寄附行為改正委員会を設置して改正作業に着手した。爾来四年有余にわたり鋭意検討を加え、六〇年一〇月文部大臣の認可を経て改正となった。以下、改正の主な点、事由ならびにその条項について左記する。

- (1) 前記改正の趣旨をふまえ、第三条中に、「創立者井上円了博士の建学の精神に基づき」を加えて、時代の進展に伴う本学発展のための組織運営の基本事項を定めることとした。
- (2) 本学の運営は、本学発展の歴史的過程を考慮し、卒業生、教職員、学識経験者の三者によつてなされることを確認した。なお、白山、朝霞・川越各校地の整備充実を図り、事務機構を整理して事務局長を置き、これを職務上の理事として、

理事定数を一名増員した。

(3) 第八条として新たに理事の退任事由を明示することにより理事会運営の円滑化を図った。

第八条 理事は、次の事由によつて退任する。①任期の満了。②辞任および死亡。③第三条第五項の場合。④学校教育法第九条各号に掲げる事由に該当するとき。⑤理事を解任されたとき。

(4) 従前、慣行として行われてきた理事長が常務理事を推薦することについて本条中に明示し、常務理事会を寄附行為上明文化するとともに、常務理事会に関する事項は施行規則で定めることとした。

第十二条 理事長を除く理事のうち三名を常務理事とし、理事長の推薦により理事会において選任する。

3 理事長は、業務執行にあたり協議機関として常務理事会を組織する。

4 常務理事会に関する事項は、施行規則で定める。

(5) この法人運営の最終責任は理事会にあることを明示して条文を整理し、理事会の運営および会議を円滑にするための理事会の運営と会議に関する事項を理事会で定めるよう条文を整理した。

第十二条 「理事は理事会を組織し、この法人の業務を決定する」を「理事は、理事会を組織し、理事会は法人の業務を決定しその運営の責に任ずる」に改める。

(6) 学校法人における監事の役割が重要性を増している現状に鑑み、不要な表現を削除し、監事の任期を理事同様三年とした。

第十五条 「監事は、監査のため必要あるときは、理事会の議決を経て一名を常任とすることができる」を、「監事のうち一名を理事会の議決を経て常任とすることができる」に改め、「監事の任期を二年とする」を「監事の任期は三年とする」に改める。

(7) 学内諸規程のうち特に寄附行為に関する規則、規程、細則等を体系化する必要があるので、その根拠を寄附行為に設けるよう配慮し、できる限り寄附行為および施行規則を整理した。

第四十五条

この寄附行為の施行に關し必要な事項は、別に定める寄附行為施行規則による。

第四十六条

この法人の規則等は、この寄附行為に定めるもののほか理事会で別に定める規程により制定する。

五 三校地有効利用の基本方針固まり朝霞校地の整備進む

昭和五七年五月発足した教学制度専門部会ならびに校地建設部会は、二カ年半にわたる審議を経て、白山五学部（第一部）は統一新キャンパスへ移行する方針を固めて研究・教育学習長期実行計画委員会に報告した。

その内容は、統一新キャンパスは一一万坪以上で、所在地は東京近郊（主候補地、埼玉県滑川村）とし、移行は創立一〇〇周年にあたる昭和六二年ということであった。

各学部が統一して同一キャンパスに所在することは、大学設置基準の解説にも明記しているとおり大学のあり得べき固有の姿であり、望む得べくんばそうありたいものである。しかし、金に糸目をつけない親方日の丸ならまだしも、苦しい財政状況の中で呻吟している私学としては夢のまた夢というべきであろう。

戦後忽々の間、白山校地を売却して上福岡移転を真剣に論じて果たし得なかった歴史を繙くまでもなく、一〇〇年になんなんとする本学の長い道程と伝統の中で、本拠地の白山を捨てて他に移ることへの卒業生その他の強い抵抗は目に見えて至難であることは委員も十分わかつていたはずである。しかし、大学の在るべき理想の姿を掲げることも、教育と研究を本務とする大学教員のあるべき姿勢として納得できなくもない。

右の答申を受けた大学当局は、五学部を遠隔の統一校地に移転させ、入学定員を現行の一・六倍にするという、巨額の資金を必要とするこの案についてあらゆる角度から調査検討を行った。その結果、その実施はきわめて困難と判

断し、白山・朝霞・川越の三校地有効利用を改めて今後の基本方針として打ち出し、各委員会もそれを諒承したのである。

朝霞に二万三〇〇〇坪の土地を購入して五年目で朝霞移行を開始し、さらに八カ年かかってやっとここに結論を得たのである。文部省当局と確約した白山五学部朝霞移行を取りつけるために、法人理事会はじっくり腰を据えて待っていた。このことは、川越移行に端を発して一〇年間続いた大学紛争を嫌というほど経験しているだけに、急がば回れで無理強いを避けたことになる。

営利を目的とする企業ならとくに潰れたであろうこのスローモーションな動きこそ、二万人近い学生と七八六名の専任教職員を擁する法人当局として、熟柿が木から落ちるようにそこに落ちつかざるを得ない大学の財力と宿命とを見きわめていたとも取れなくもない。

ここに、六〇年一月二〇日発行の東洋大学報第七二号に報ぜられた理事長、学長の年頭所感の抜粋を掲げる。

理事長 石川知治

(一) さて、本学の創立百周年も余すところ二年となった。今年は、記念事業計画の推進にさらに拍車をかけるための募金活動の実現をはからねばならない。三校地有効利用という将来の明るい展望をひらく朝霞校地の整備計画も着実に進み、この三月には第三校舎の完成をみるに至った。

(二) 白山五学部一・二年次生の教育を朝霞校舎で完全実施という対文部省確約事項については、本年度から文学部一年次生、六一年度から文・社会両学部二年次生の授業も行うことになり、万事解決するに至った。この決定は、臨教審が発足し検討されている今日、本学の将来にとって大変明るい見通しをもたらし、今後の長期構想にむけた施策に意義あらしめるものとなった。

一つの善事は他の幾つもの善事を呼び起こすものであることを感じずにはいられない。

学長 西忠雄

(一) 朝霞移行の道は平坦でなかったという以上に、苦渋にみちたものであったといわざるをえない。統一校地の取得が物理的その他さまざまな理由から不可能なことが明らかに、しかしこれ以上の遅延はもはや許されないという切迫した状況の下で、移行の完成を計ることとなったのである。

(二) 朝霞移行を機に想うことの第一は、本学の真の存在理由がどこにあるか、であり、第二に、今後これをどのように充実し、どのような大学として発展させてゆくか、ということである。あらためていうまでもなく、本学は創始者井上円了によって「哲学館」として発足した。この「哲学」という語には、人類が三千年にわたって求めつづけて来た学問と文化が、いわば一点に凝集して収められていると思う。円了は全く在野の人で、権力に頼らない生き方の根本を求めつづけてきた。その思想には宇宙的規模で考えられるものがあつたと見られ、常に「生きた総合」を求めるものがあつたといえる。

私共は今、総合的・普遍的な知識と知恵を求めてやまない。そしてこれを自力で獲得することが私どもの大切な課題である。私学はそのバイタリティをもっているかどうかで命運が決められる。「哲学をもつ私学」の精神を私共は誇りとし、これを本学の真の基礎として立てて行きたいと思う。

(三) 朝霞キャンパスがたんに一・二年次生の通過地点であつてはならない。つまり、この新しいキャンパスでは、新しいタイプの教育が試みられてよいのではないかと考えられるし、これも百年を迎える本学の大きな課題である。

大学は生涯教育の場として、広く市民に開かれたものであることが必要である。従つて、このキャンパスが、朝霞市をはじめ周辺都市の発展に大きく寄与し、市民の生活にとつても重要で、いわば市の「故郷づくり」に役立つようなものであつてほしい。ヨーロッパやアメリカの大学の良き伝統は、学問の担い手であると同時に、他面、市民の中に深く入って行った努力の賜物であるといえる。

(四) 図書館、研究棟、体育館はじめさまざまな施設が必要であるが、同時にキャンパスを緑でおおうとか、美の情緒をは

ぐくむ芸術作品をおくことなどが強く求められている。教育に関しても、技術化し細分化した現在の知識をそのまま学生におしつけてよいものではない。学生自身が何かを求めてゆくような一つのゆとり、そしてそれをひそかにうながす自然と芸術が大学にとつてどんなに必要かということを私共は改めて考え直さねばならない。初心に還るとは、このようなことはないだろうか。

昭和六〇年九月、神作光一が第三代学長に就任し、同年一二月田中栄次が理事長に就任した。文学部一年次生の授業はすでに朝霞校舎で行われており、六一年度から文・社会両学部二年次生の授業を朝霞で行うことは、両学部教授会の審議を経て確定していた。

三校地有効利用の基本方針が決まった以上、その後の展開は速かった。

① 六〇年九月、一号館近くの市街化調整区域に約五〇〇〇平方メートルの校地を取得し、同年三月、三号館（三階建約六九一平方メートル）を完成した。

② 六一年三月、二号館に隣接する現有校地に創立一〇〇周年記念図書館（地下一階、地上三階建、延七二〇六平方メートル）と研究管理棟（二九三八平方メートル）を完成し、図書館地下に軽食堂（二〇〇席）、売店を設けた。

③ 一・三号館校地と二号館校地をつないで一団の校地とするに必要な三万平方メートルの校地を六〇年末に購入し、当面グラウンドとして開設した。これにより朝霞校地は一〇万七九〇〇平方メートルとなった。

④ 図書館分館跡は、演習用小教室に改修した。

なお、選任教員二五名を六〇年四月から増強した。

学則定員変更

白山五学部（第一部）一・二年次生の授業が、朝霞校舎で実施となった昭和六一（二九八六）年四月から入学定員の改正に必要な教員、校地・校舎等が充足されたので、文部省の認可を経て学則定員

旧 課 名	教務部	学生部	新 課 名
	文学部事務課 経・経営学部事務課 法・社会学部事務課	学生課 厚生課	
新 課 名	教務部	学生部	
	教務課	学生部学生生活課	
旧 課 名	教学部	学生部	新 課 名
	教学課	学生生活課	

表-7 学則定員変更(昭和61年4月)
単位:名

学部(一部)	51年4月	61年4月
文学部	400	520
経済学部	300	500
法学部	400	500
社会学部	300	400
経営学部	300	500
工学部	600	600
計	2,300	3,020

の変更を行った(表-7)。

実員の定員化は、早くから文部省の要望事項であった。ここ数年来の出願総数は五万人を越える現状からみて、一学部三〇〇人という入学定員は少なすぎた。その入学定員を法文系一学部五〇〇人に改正されたことは、実員に近い改正というべく、多年の懸案事項であったばかりでなく、今後の本学運営の安定に資する画期的なことであった。

事務局組織一部変更

白山五学部(第一部)一・二年次生の朝霞移行が完了し、白山校舎における五学部(第一部)の学生数も半分に減少したので、六一年七月、教務部・学生部ならびに教学部の組織が上記のとおり一部変更された。

土地・建物の面積（学校法人東洋大学、土地・建物の面積）

土地（昭和六二年七月四日現在）	校舎等建物（昭和六三年三月二二日現在）
白山地区 四万八一四八・八七㎡	四万七二一七・〇一㎡
川越地区二八万六九七九・三〇	四万二九一・二〇
朝霞地区一〇万七九〇〇・〇三	三万六六六・七七
姫路地区一〇万九一一七・三三	一万二四七二・五三
牛久地区 四万九六〇八・五四	一万六九三七・八二
計 六〇万一二五四・〇七	一五万六二〇五・三三

井上円了先生頌徳碑
の移設完成式挙行

「井上円了先生頌徳碑」の移設完成式が、昭和六二年五月二三日午前一一時から同碑のある新潟県三島郡越路町の信濃川公園において挙行された。

当日は、大学から田中栄次理事長、神作光一学長をはじめ役員、教職員、校友、学生が出席し、地元から平石金次郎越路町長以下越路小学校の児童ら約二〇〇名が、雨の中を参列した。

同碑は、本学創立七〇周年記念に際し、現在地近くの県道沿いの越路橋脇に建立、その後、交通量の激増など環境悪化が進み危険性がともなうことから、創立一〇〇周年記念を機会に移籍にふみきったものである。

また、郷土資料館では、東洋大学一〇〇周年記念井上円了先生の遺墨展が開催され（五月二日～五月三十一日）多くの見学者が訪れた。

「東洋大学発祥之地」記念碑 本学は、創立一〇〇周年を記念して、昭和六二年九月一六日午前一一時から麟祥院（文建立除幕式挙行 京区湯島）に、「哲学館発祥之地」の記念碑建立の除幕式が行われた。

当日は、来賓に文京区長遠藤正則氏、麟祥院住職水野昌晃氏、大学から田中栄次理事長、神作光一学長はじめ関係者一〇〇名が参列した。

式典は、本学混成合唱団による「追悼歌」のあと、田中理事長、神作学長により記念碑の除幕が厳粛のうち挙行された。

続いて、田中理事長、遠藤文京区長、水野住職の挨拶があり、大学歌斉唱で終了した。碑の正面には、本学OBで書家の中井史郎氏の揮毫による「東洋大学発祥之地」、裏面には建立の趣旨が刻まれている。

高さ一・七メートル、幅一・五メートルの大きさに、材質は、湯河原産の本小松石である。

六 東洋大学創立一〇〇周年を祝う

記念式典 東洋大学創立一〇〇周年記念祭典は、昭和六二（一九八七）年六月六日（学祖祥月命日で学祖祭日）午後一時から両国、国技館において五〇〇〇人の観客を迎えて行われた。

まず、司会進行役の徳光和夫氏の紹介で、田中栄次理事長、神作光一学長からあいさつがあり、理事長は、「不死鳥のごとく、その精神を東洋大学で燃焼し、新しい大学を創りあげようとする不断の努力と一〇〇年の歴史に應える我

われの行き方である」と語り、また学長は、「たった一回の一〇〇周年を祝う年に奇しくも諸君は出合うことになった。この巡り合わせを大切にし、たったひとりしかない自分を十分認識し、充実した学生生活を送って欲しい」と語った。

ついで作詞家、阿久悠氏の講演に移り、主に、「青春」「可能性」等をテーマに話が展開されて盛大な拍手喝采が、高い国技館の天井に響きわたった。

三時からは杏里のコンサート。最新アルバムを中心に計一七曲、アリーナ席の学生達は総立ちとなり、最高の盛り上がりを見せ、「一〇〇周年記念祭典」の名にふさわしく、活気に溢れたイベントであった。

創立一〇〇周年記念式典

盛大に挙行

東洋大学創立一〇〇周年記念式典は、昭和六二（一九八七）年一〇月二八日午前一時から帝国ホテル三階富士の間において、塩川文部大臣をはじめ国際学術交流協定大学長、各界代表を来賓に迎え、卒業生、教職員等関係者約一二〇〇人が参列し、厳肅のうちに挙行された。

開会に先立ち、創立一〇〇周年を記念して作られた式典序曲「讃えんかな東洋大学」が、東洋大学管弦楽団・同混成合唱団・同白山グリーククラブにより演奏された。

式典は坪井一記念行事実行委員長の司会で進められ、菅野康雄常務理事の開式の辞に引き続き、大学を代表し田中栄次理事長から、「本学の一世紀の歩みを振り返るとともに、第二世紀に向けての教育・研究体制の充実と懸命の努力を傾注して社会の要望に応えたい」と式辞が述べられ、続いて神作光一学長からは、「創立者井上円了の建学の精神、教育の理念を見直し、それを未来に向けてしっかりと継承し、私立大学としての個性化を図りたい」と力強い挨拶が行われた。

来賓代表として文部大臣塩川正十郎氏、日本私立大学連盟会長石川忠雄氏、国際学術交流協定大学代表ストラスブ

ール第一一大学長トロクメ・エティエンヌ氏から祝辞が述べられた。

式典終了後、会場を二階の孔雀の間に移して、本学卒業生でタレントとして活躍中の神太郎氏の軽妙な司会で、午後一二時三〇分から記念祝賀会が約二〇〇〇人を集めて盛大に開催された。

祝賀会では、理事長、学長のあいさつに続いて来賓を代表し日本私学振興財団理事長清水司氏、東洋大学校友会長石田幸男氏の祝辞があった。

引き続き田中理事長、神作学長、学生代表により鏡開きが行われ、元文部大臣・元本学理事長劔木亨弘氏の乾杯の音頭で午後一時一五分から祝宴に入った。

祝賀会場では、いたる所に歓談の輪が広がり、来賓からのスピーチをはさんでアトラクションの獅子舞太鼓などの披露があり、一段と盛り上がりを見せた。

最後に、藤井潔常務理事のお礼の言葉で午後二時一〇分、一〇〇周年の祝賀会はつつがなく終了した。

むすび

明治二〇年、「諸学の基礎は哲学にあり」という哲理のもと井上円了博士によって創立された「哲学館」が、その後「哲学館大学」、「東洋大学」と校名変更を遂げてここに一〇〇年の歳月を閲し、今や「学祖」という称号が関係者の間で素直に定着をみるに至った。

本学は、大正から昭和にかけて幾多の事件に遭遇した波瀾に富む歴史に苦しみながらも、不死身のように大器晩成を堅持して今日の隆盛を迎えたのは、在野の人として学校教育と社会教育に生涯をかけた哲人学祖の偉大さに負うところきわめて大である。

東京空襲で白山校舎が廃墟と化してから星霜すでに四〇年、愛校の志篤く、第一線で健闘した志士も多く愛理の鬼となつて創立一〇〇周年を迎えた。幾多の苦難を乗り越え、民主的に脱皮を果たして創立第一世紀の竿頭に立った本

学が、他に類例のない優れた建学の精神を顕現し、さらにいっそう興隆発展の歩度を早められんことを祈念してやまない。

(大野文吉)